
河童

ハセガワハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河童

【Nコード】

N0700W

【作者名】

ハセガワハルカ

【あらすじ】

河童のおじさん、ボブおじさんと順平君の他愛ない雑談風景。

ごはんライスさん主催、【夏の灼熱ギャグ小説企画2011】飛び入り参加作品です。

——例えば、『魔法の使えない魔法使い』

『魔法使い』だなんて大仰な敬称を持つている癖に、その魔法使いは魔法を使えなかったとしたらそれは一種の詐欺であると言える。

例えば、『食べられないパン』

『フライパン』なんて答えは許さない。食べられない、『パン』と言っている以上、その、『パン』は食用を前提に、『パン』と名乗っているのだから、やはりその『パン』はパン失格であると言えるだろう。

なんちゃって。

「おう坊主、毎度！　いつものでいいのかい？」

「うん、お願い」

ただいま学校からの帰り道。

僕は哲学的でとりとめのないどうでもいいことを考えながら、商店街に寄って八百屋さんで『いつもの』を購入する。

「はい、きゅうり十本。いつも悪いね！　一本、多く入れといたから！」

「ありがとう」

大将へのあいさつもそこそこに、僕は足早に目的地へと向かう。

商店街を抜けて、街並み外れた雑木林へ。

林を抜けた先には川が流れていて、その川沿いに、申し訳なさそうに建てられたボロ小屋が一軒、こぢんまりと建てられている。

築何年かなんて想像も出来ないほどボロく、心許ないその小屋に向かって、僕は声をかける。

「ボブおじさん！」

すると、間もなくして。

ギギギ、っと、立てつけの悪そうな引き戸を開く。

「……おう、ジュンペーか。来たんか」

姿を現したのは、河童だった。

……河童というからには河童であり、河童以上の何者でもなく、河童は河童だ。

緑色の体色に甲羅。頭にはしっかりと皿が乗っていて、全身も仄かに潤っている。

通称、『河童のボブおじさん』

なぜ日本の妖怪が、西洋風の名前なのは、気にしてはいけないらしい。

「こんにちは。調子はどう？」

「あかん。昨日、雨降ったやろ。そのせいで川の水かさが上がってもうて、こらいかんわ」

この会話から推測できるように、河童であるところのボブおじさんは、なんと泳げないのだ。

以前、『河童なのに、泳げないの？』なんて、迂闊にも直球で問い掛けてしまったことがあるのだけど、

『泳げんもんはしゃーないやないか、それとも何か？ 歩けない人間は、人間失格ってか？ どこぞの太宰治じゃ！ 赤ちゃんだって歩けへんやろが！』

っ感じで、恐ろしい形相でよくわからない説教をされたので、それ以来このことは禁句になっている。

きつと、なにか嫌な思い出があるんだろう。

それはともかく。

泳げない河童であるところのボブおじさんは、綺麗な川を探して日本各地を転々とし、こうして川沿いのボロ小屋に隠れ住んでは、毎日泳ぐ練習に精を出しているらしい。

「はい、きゅうり」

「おおっ、毎度すまんな」

さきほど購入したきゅうりを、ビニール袋ごと手渡す。

河童の癖に泳げないボブおじさんだけど、河童らしくきゅうりが大好物なのだとか。

「ほな行こか」

言つて、ボブおじさんは川の浅瀬に腰かけた。川に下半身を浸して、きゅうりを片手に悠然と立つその姿は、流石は河童といったところで、とてもさまになっている。

「あつ、いかん！ コケ踏んでもうた！」

つるんと、ボブおじさんは川の中で足を滑らせた。

前のめりにすっ転んで、川の深瀬へとダイブしてしまう。

軽くパニック。

「た、助けてくれー！」

ばしゃばしゃともがくように、水かきのついた手をでたらめに振り乱しながら、ボブおじさんは必死に助けを請う。

頭に皿を乗せた緑色おっさんが川でおぼれている姿は、相当に不気味だ……、なんて考えてる場合じゃなく。

「ボブおじさん！」

僕は慌ててボブおじさんの手を掴み、浅瀬へと引っ張り上げた。

「大丈夫？ ボブおじさん」

「あ、危なかった……。いや、死ぬかと思つたで、ほんま……」

肩で息をするボブおじさんの姿を見て、僕の脳裏には、『河童の川流れ』という言葉がよぎったけれど、マジギレされそうなので口には出さない。

気を取り直して、ボブおじさんは浅瀬にあぐらをかいて座り、僕は向かい合わせになるように砂利の地べたに体操座りで腰を下ろした。

いつもなら、泳げないボブおじさんのために、僕が泳ぎを教える時間になるのだけど（僕は水泳が得意なのだ）。

今日は、話したいことがあつたんだ。

「……ボブおじさんって関西弁使うけど、西の方から来たの？」

「せやな。まあ、西の方は西の方やけど、大阪とか京都みたいんだ御所とは違いわ。三重県とか福井県とか、その辺」

「曖昧なんだね」

「せやな」

もちろん、ボブおじさんの出身地なんかどうでもいい。
間をおいて、本題に入ることにする。

「あのさ」

「ん？」

膝小僧を見つめながら、努めてなんでもないことのように、僕は切り出した。

「……僕、学校でいじめられてるんだ」

「そうなん？」

そう。僕は、学校でいじめられている。

気を許せる友人もない。

だから、今日はそのことを相談するために、河童のボブおじさんの元へ訪れたのだ。

なんだかんだで、人生経験豊富そうなボブおじさんのことだから、きっと良い助言をもらえらると思つてのことだ。

対して、ボブおじさんはいつもの調子を崩すことなく、落ちていく夕日を眺めながら答えた。

「……わしも、お前さんくらいの年の頃は、いじめられとつたな」

「ボブおじさんもそうだったんだ？」

「そりやそうや。河童やのに、泳げへんのやもん」

「ああ……」

なるほど。

だから、この前あんなに怒つてたんだ……。

思わぬところで、ボブおじさんの心の闇に触れてしまったみたいで。

「……」

「……」

川を見つめるボブおじさんの瞳が、ちょっとだけ揺れた気がした。
少し、しんみり。

「……なんやこの流れ、ミラ。ルエースみたいやな」

「え？ なにそれ？」

「知らんのか！？ お前、あの伝説的バラエティ番組を知らんのか！？」

「し、知らないけど……」

ボブおじさんは、「ジェネレーションギャップやでえ……」と呟いて、きゅうりをかじった。

どうして河童なのに、バラエティ番組に詳しいんだろう。

「……まあええわ。別に、わしは変なもん売りつけたりせえへんから、安心せえよ」

「よ、よくわからないけど、ありがとう」

「おう……」

「……」

本日、三度目の沈黙。

もうしばらくもしない内に、夕日は落ちきってしまうだろう。時間が立つのは早い。

「今日はもう帰るね」

「なんや、もうそんな時間かいな」

「ごめんね、変な話しちゃって」

「ま、ええよ。ほな気いつけてな。今度は泳ぎ、教えてな」

「うん」

言って、ボブおじさんは夕日を見つめたまま手を振る。その手を視界の端に映しながら、僕は帰路へと……。

「あかん、ザリガニ踏んだ！ 助けてくれえ！！」

「ボブおじさん！」

……明日こそは、ちゃんと泳ぎを教えてあげようと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0700w/>

河童

2011年8月24日03時22分発行